



実践女子大学 実践女子大学短期大学部

NO.23

2024年7月

下田歌子記念女性総合研究所

News letter



高橋桂子所長と久保貴子専任研究員が韓国・敬仁女子大学を訪問しました
(2024年3月)

Contents

- 02 Column 01
敬仁女子大学と梨花女子大学を
訪問してまいりました

所長 高橋 桂子

- 03 Column 02
下田歌子の足跡—韓国訪問記—

専任研究員 久保 貴子

- 04 Column 03
研究紹介
料理における香りの世界

兼務研究員 佐藤 幸子

- 05 Column 04
研究紹介
包摂的な科学技術イノベーションプロセスとは？

兼務研究員 標葉 靖子

- 06 Column 05
研究紹介
文学と教育学の往還—歴史を見つめて

客員研究員 眞有 澄香

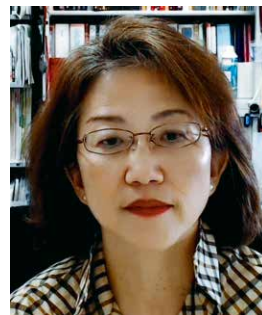
- 07 Column 06
女性画家たちから学ぶこと—香雪記念資料館の活動を通じて—

香雪記念資料館館長 児島 薫

- 08 今年度の活動

敬仁女子大学と梨花女子大学を 訪問してまいりました

所長・生活科学部生活文化学科 教授 高橋 桂子



2 024年3月11日（月）から3月14日（木）まで、久保専任研究員と韓国の女子大学を訪問してまいりました。世界広しといえども女子大学が複数存在する国はアメリカ、日本そして韓国だけです。隣国の女子大学ではどのような教育が展開されているのか、インタビューしてまいりました。

3月12日（火）は、本学協定校・敬仁女子大学を訪問しました。本学国際交流推進課から先方を紹介いただき、訪問依頼のメールを差し上げましたら、ほどなく訪問OKとの返信が届きました。当日は待ち合わせ時刻より30分ほど前に到着し、正門守衛室に立ち寄った後、キャンパス内を散策いたしました。正門から本館前に至る空間には彫像、石碑が多数、また手入れの行き届いた花壇があって、気持ちの良い空間が広がっていました。

会議室では、Park教授、Kim教授、そして留学経験があり英語に堪能なスタッフのChoiさんを交えて意見交換を行いました。韓国における女子大学の意義は、男子には徴兵制がありリーダーシップやチームワーク

の在り方をトレーニングする機会がある、女子にはその機会がない、それを行えるのは女子大学だといったお話や、韓国と日本は少子化、女性を取り巻く社会環境、ジェンダー格差など多くの面で課題を共有している、少子化や家事分担について日本ではどのような議論があるのか、実際はどう、といった質問も頂きました。

3月13日（水）は、学祖下田歌子先生も立ち寄られた昌徳宮（チャンドクン）を訪問、翌3月14日（木）は、梨花女子大学を訪問しました。訪韓前、Human Resources Development Center 宛に訪問依頼のメールを差し上げたのですが、Career Development Center から、授業が始まったばかりで忙しい、残念だが対応できない、といった返信が届きました。敬仁女子大学を訪問した時、他にどの女子大学を訪問するのと尋ねられましたので少し事情をお話したら、Park教授が知り合いの教授に頼んであげる、ということで、その日のうちに梨花女子大学の先生を介して元Leadership development center 所長のDr. Kangをご紹介くださいました。何とも有り難く、頼もしく、そして心強く思ったものでした。

Kang教授の研究室では、梨花女子大学の学生の大学生活満足度は、学年が上がるに連れて高くなる、本学ではリーダーシップ教育に力を入れていてトレーニングをしっかりと行っているのので地域にボランティアに連れて行くと共学の女子大学生よりスムーズに当事者たちとラポール関係を築くことが出来る、といったお話が印象的でした。

今回、ご都合をつけて頂くことは叶いませんでしたソウル女子大学、誠信女子大学や淑明女子大学などは、次の訪問機会に備えてキャンパスの場所は確認して参りました。

最後になりましたが、今回の訪韓に際しまして、言語文化教育研究センター長中山誠一先生、国際交流推進部部長内田雄介様、ならびに国際交流推進課の皆さまには大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

（TAKAHASHI Keiko）



梨花女子大学の学生達と



ドミニク・ペロー設計の複合施設複合施設にて（梨花女子大学）

下田歌子の足跡

—韓国訪問記—

専任研究員・専任講師 久保 貴子



高 橋桂子所長の就任時の早い段階から海外の女子大学を訪問し、リーダーシップ教育やキャリア教育の実状を視察しようとする計画があったが、折からの世情に伴い断念せざるを得なかった。しかし、言語文化教育研究センター・センター長中山誠一教授、国際交流推進部・部長内田雄介氏をはじめ関係各位、高橋所長のご尽力により、今春3月11日（月）から14日（木）まで、念願叶って高橋所長と共に韓国の女子大学を訪問する機会に恵まれた。

下田歌子は大正9（1920）年に、自身が趣旨書を起案した愛国婦人会の第5代会長に就任している。大正年間の下田歌子の活動は実に多岐にわたり、まさに女子教育の先駆者と呼ぶに相応しい目覚ましい活躍を見せている。齢六十から七十三であったが、下田には老いの翳は微塵もなく、時系列で言えば、この翌年に、下田歌子は当時の朝鮮、満州へ出かけている。下田の旅は、大正10（1921）年10月1日（土）から23日（月）までの23日間にわたった。下田は、愛国婦人会朝鮮本部第4回総会（10月5日）に臨み、京城（現在の韓国ソウル特別市）をはじめとして、各地で講演を行った。しかし、その一方で高等女学校、女子高等普通学校（注1）、女子技芸学校などの女子教育機関や京城幼稚園（官立京城高等女学校構内）、庚子記念幼稚園（東本願寺京城別院内）へ積極的に見学に出かけている（注2）。

1925年段階で公立の女子高等普通学校は、京城と平壤のわずか2箇所、女子高等普通学校の設置は

主要都市に限られ、その展開は積極的とは言えなかった。こうした状況を何とかしたい、変えたいという思いからの見学であったのではないか。李王家の訪問や李朝朝鮮の宮殿である昌徳宮後苑（秘苑）での、残された写真からは（注3）、下田歌子が現地でいかに歓迎されていたかが窺い知れるのである。現在の昌徳宮後苑を訪ね、女子教育萌芽期に、しかも遠く離れた地で、下田歌子の眼に映ったものは何だったのだろうかと思いを馳せた。

もちろん昔日と学校の教育方針は大いに異なり、この変遷の中で、大変な労苦がそれぞれの学校にあったことがしのばれる。今回は、本学協定校でこれも優れた女子教育を推進していることで知られる敬仁女子大学を訪問し、Kyungok Park教授、Eun Jin Kim教授、ソーシャルサービスセンターのKyung Eun Choi氏のあたたかい歓待を受けた。三時間を超える意見交換となり、その際、女子教育への情熱を熱く語る韓国の先生方を目の当たりにし、女子教育という共通の課題を共にする連帯感をあらためて強く感じた。また、梨花女子大学のMin Ah Kang教授には研究室訪問をご快諾くださり、キャリア教育・リーダーシップ教育について示唆に富むご教示を多々賜る機会を得られた。お目にかかった方々に深く感謝し、この旅の意義を反芻した次第である。

(KUBO Takako)

- 1) 日本統治時代の朝鮮における中等教育機関。
- 2) 実践女子大学図書館蔵下田資料589。
- 3) 実践女子大学図書館蔵下田資料2801、2804。



愛国婦人会朝鮮本部総会の折に



愛国婦人会朝鮮本部第4回総会にて



現在の昌徳宮後苑(秘苑)

兼務研究員

生活科学部食生活科学科 教授

佐藤 幸子



筆

者の研究分野は、調理過程において美味しさに関わる《香り》の探求である。

《香り》の研究対象はハーブ (herb) である。現在、本学日野キャンパスに小さな菜園を開墾し、学生たちとハーブを育てている。雑草のように繁殖力が強く、手がかからないハーブ栽培の利点は、摘み立てのフレッシュハーブティーを堪能できることであり、心休まる新緑の芳香を持つお茶は至福のひと時を演出してくれる。



日野キャンパス5館南角側(左:4月、右:6月撮影)

さて、「美味しい香り」という表現は適切ではないが、私たちの生活は、多種多様の香りが存在し、それに惹かれて食欲をそそられることがある。生臭さのある魚とハーブ (ディル) を一緒にオープン焼きすると甘い個性的な《香り》が賦香される。その美味しい香りについて探求することが研究テーマである。

「香り成分」の分析は、GC (Gas Chromatograph) により香りを分離し、MS (Mass Spectrometry) で分子をイオン化して分解してできたイオンの質量を測り、「香り成分」の特徴を検証できる。

図1は、ディル (Dill: *Anethum graveolens*) の揮発性成分を示したクロマトグラムである。ディルは、軽

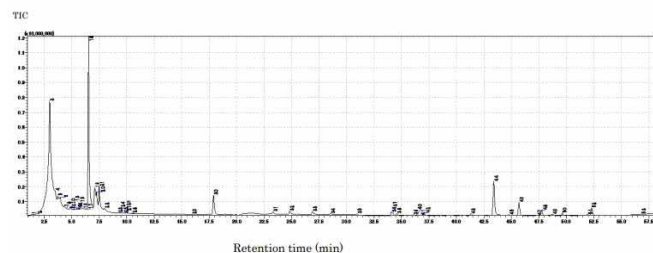


Fig. 1. GC/MS chromatogram of Dill volatile compounds.

※参考文献:佐藤幸子 数野千恵子「ハーブの香気成分が合わせ酢の食味に及ぼす影響について」日本調理科学会誌 50, 1, 13-19(2017)

い香りでありアニスやレモンを思わせ、シーフードの料理に風味付けとして効果を発揮する。

さて、ハーブと同じく料理において《香り》を賦香するスパイスがある。個人的な解釈として食用のハーブもスパイスも料理においては『香りづけ』『辛味づけ』『色付け』の3つの役割がある。ハーブ類はフレッシュで使用する場合に多く、スパイスはドライにして使用し、形状としてホール状、粗びき、パウダーがある。

《香り》の食材は、いずれもブレンドして使用することで《香り》の奥深さをプラスすることができる。和食におけるブレンドスパイスとして江戸時代に生まれた七味唐辛子がある。七味唐辛子はその名の通り、七種類の食材をブレンドしている。その7種類の構成は、2種類の辛味と5種類の香り (二辛五香) の組み合わせを基本としている。一般には、二辛は唐辛子と山椒、五香は陳皮、青のり、ごま、麻の実、けしの実であるが、郷土で収穫できる食材を代用したり加えたりして地域性がみられるようになった。そのほか日本発信のカレー粉は約20から30種類のブレンドスパイスからできており、今では本場インドでも日本製のカレー粉が使われている。

さて、表題「料理における香りの世界」は、現在拡大し続けており、多国籍料理も日本社会に定着し、今まで知らなかったハーブやスパイスの《香り》も好まれるようになってきた。最近の話題として、ハラル食の影響なのか、ハーブやスパイスを食材として、ノンアルコールドリンクの開発も盛んにおこなわれている。ハーブのすっきりした香りにスパイスの辛味や苦味をプラスしてあたかもワインのような味わいを出して、料理とノンアルコールのマッチングにより料理の美味しさを引き出す試みがフレンチレストランなどで提供されている。

ハーブは料理の新しい食味を生み出す食材として、サステイナブルな食生活に思いを巡らし、庭のハーブをせっせと積んでは食卓をアレンジしている今日この頃である。

(SATO Sachiko)

包摂的な科学技術イノベーションプロセスとは？

兼務研究員

人間社会学部社会デザイン学科 准教授 標葉 靖子



私

の現在の研究上の主な関心は、科学技術イノベーション (STI: Science, Technology, and Innovation) プロセスへの多様な人々の参加のあり方についてです。とくに近年は、共創をキーワードとしたコミュニケーション・デザインや STI プロセスへのジェンダー視点の取り込みに関する調査研究を行っています。学問領域でいうと科学技術社会論と呼ばれる領域に該当します。

現代社会が抱える課題群は先端科学技術の進展を抜きには語れないと同時に、その課題解決にあたっては倫理的・法的・社会的課題や経済発展への影響など、科学技術以外の社会の諸側面を考慮する必要があります。そうした「科学技術と社会」をめぐる問題に対処していくために、今や世界各国で STI プロセスへのより多様な人々の関与、すなわち多様性と包摂性が重要であると考えられるようになってきています。

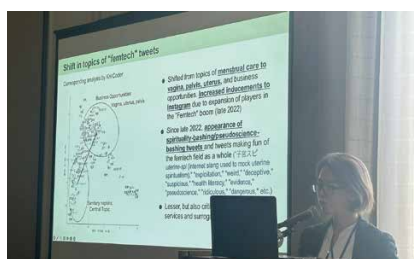
STI プロセスの多様性と包摂性に関連して、近年日本でも注目されるようになってきている考え方の一つが「ジェンダード・イノベーション (GI: Gendered Innovations)」です。「科学技術とジェンダー」をめぐるでは大きく二つの問題が挙げられます。一つは科学技術分野におけるジェンダー格差の問題であり、科学技術分野における女性割合・数の少なさ、組織・制度上の課題、知識・意思決定プロセスへのアクセシビリティ格差などが挙げられます。もう一方が、ジェンダー視点から問い直される科学技術「知」の客観性や中立性の問題です。知の生産プロセスにおけるジェンダー格差や無意識のジェンダーバイアスが、結果として大学や企業等で生み出される知識やそれに基づく技術や製品

の開発等に偏りと画一性を生じさせること、それによる女性（の問題）の不可視化、リスク・便益分配の不平等などが問題となります。

こうした「科学技術とジェンダー」をめぐる問題群に対して、「知を是正する (Fix the Knowledge)」ためのアプローチとして 2008 年にロンダ・シービンガーによって提唱されたのが GI です。GI は、生命科学・工学・社会科学を含む広範な分野における基礎研究ならびに応用・開発において、ジェンダーやセックス、多様な性のあり方を考慮した性差分析が重要であるとして、そのための手法を開発するところから始まりました。現在では、ジェンダー平等を含めた多様性と包摂を達成するというグランドビジョンに基づき、性別（ジェンダー・セックス）だけでなく、民族、年齢、社会経済的状況、セクシュアリティ、地理的位置、障害などの「交差性 (Intersectionality)」分析の重要性も指摘されるようになってきています。

このような背景のもと、私は現在、包摂的な STI プロセスのあり方について、ジェンダー視点の取り込みや科学技術への低関与層との関わりなどを中心に、コミュニケーション・デザインやメディア言説分析などを行っています。その一環として取り組んでいることの 하나가、日本における「フェムテック (FemTech)」ブームを対象とした研究です。「フェムテック」とは女性の健康・ウェルネスにかかわる課題を（主としてデジタル）技術を用いて解決するプロダクトやサービスの総称であり、欧米を中心に近年その市場が急成長しています。フェムテックと GI は、いずれも科学技術の研究開発・社会実装と多様な性のあり方に関わる用語です。しかしながら、その概念の理解のされ方や位置付けには国・地域等によって相違が認められます。たとえば日本ではフェムテックと GI がどちらもメディアや政策文書において同時に言及されますが、このような動向は他国ではあまり認められません。日本の SNS においてフェムテックがどのようなイメージとともに語られているのかを分析し、そのイメージが GI 動向にどのような影響をもたらしているのかを考察した論文が実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所年報 10 号に掲載されていますので、ご笑覧いただければ幸いです。

(SHINEHA Seiko)



4S 2023 Honolulu (国際科学技術社会論学会、ホノルル開催) での研究発表の様子

文学と教育学の往還

——歴史を見つめて

客員研究員

國學院大學大学院兼任講師

眞有 澄香



実

実践女子大学大学院博士課程を単位修得退学後、東京学芸大学連合大学院（博士課程）を修了し、大学・大学院に奉職しながら、教育学と文学のダブルドクターとなった。今年度より、本研究所に客員研究員として就任するというご縁をいただき、研究者としての姿勢や基礎をご指導いただいた母校での研究を前に、身の引き締まる思いがしている。

ついては、紙数の都合上十分ではないが、いまの関心事を記すことで、自己紹介に代えたい。

周知の通り、人間と他の動物とを分かつのは〈ことば〉である。それを日常的にコミュニケーションの手段としている人間にとって、〈ことば〉は人間を人間たらしめているとさえいえる。〈ことば〉を発すること——私たちは呼吸と同じくらい、ごく自然にこれを身体化しているが、至極単純な鸚鵡返しや口まねでさえ、実は私たちの想像以上に、極めて複雑で困難な、人間的、社会的な行為なのである。それを「言の葉」と呼び、言霊信仰を見出した古代人たちは、「言の葉」に格別な畏敬の念を抱いてきた。やがて長い歴史を通じて美的に昇華された「文学」を創出し、そこに叡智だけでなく、人間という存在そのものの絶え間ない営みから湧き上がる心の声を凝集させ、伝承してきたのである。

同時に、人間にしか、ヒトを社会的存在として〈ことば〉

を操りながら活動する人間に育て、教え、導くことはできない。たとえヒトとして生まれ、野生で育てば、二本足で歩き、〈ことば〉で交流できる人間に生い立つことはない。その〈ことば〉は、戦前の学校教育では皇国民育成のための思想教育に活用された。ことに「読本」と呼ばれた

国語科講読用教科書では、「源氏物語」のみならず、写生文でさえ、兵士や良妻賢母養成のための教材にすり替えられた。このことは、〈ことば〉がいかなる時流のなかでも力を有し、なおかつ生き物でもあることを教えている。

ところで、学校教育といえば、従来の文学教材の採録が実質的に縮小されたことで話題となった現行「学習指導要領」（2017年告示）も、いまや次期改訂に向けて準備が進められている。こうした教育改革は、教育界外部の社会情勢や政財界などからの要請に応じた結果であって、ほとんどが内発的なものではない。教育行政は時代を映す鏡ではあるが、ヒトは人間によってのみ育つという教育学の原理原則は普遍である。〈ことば〉はヒトが人である証しであり、アイデンティティーの根幹でもある。その〈ことば〉の芸術である「文学」は時代を超える力をもっている。

いうまでもなく、現代の〈ことば〉＝口語体は、明治30年代に展開された言文一致運動の産物である。それは、文学者たちが苦心惨憺しながら私小説に辿り着いたことでようやく手に入れた文体であり、文学における〈スタイル〉とは、内容と不可分な関係性を有している。奇しくも同時期、我が国の教育制度の確立に伴い、標準語化政策が反映された教科書によって、日本の津々浦々まで文語体から口語体への移行が進められていった。〈私〉を語る〈ことば〉の獲得と学校教育による人格の形成。つまり、現代社会のひとつの基盤は、明治30年代における新たな口語体と学校教育の制度化とが密接に結びつきながら構築されたと見るができる。とすれば、2023年に過去最低となった日本のジェンダー・ギャップの問題は、少なくとも明治期まで遡行して考究されなければならない。

本研究所においても、決して世の盛衰や風潮に流されることのない「生」や〈ことば〉の原点を見つめ、これからも教育学と文学の学際研究に取り組んでいきたいと考えている。

(MAARI Sumika)

(紹介) 神奈川県生まれ。博士(教育学)、博士(文学)。関東教育学会研究奨励賞受賞。日本ベンクラブ会員。著書に、「読本」の研究 近代日本の女子教育」、「伝統としての〈ことば〉 鏡花とみすゞ」など多数。



高等学校校用：「高等女子読本」(明治39年)



旧制中学校校用：「現代国語読本」(大正13年)

女性画家たちから学ぶこと

—香雪記念資料館の活動を通じて—

香雪記念資料館館長・文学部美学美術史学科 教授 児島 薫



香 雪記念資料館では女性の教育に力を注いできた下田歌子先生の事績に鑑み、女性たちの芸術活動にフォーカスした作品の収集、展示、研究活動をおこなってきました。特にこれまでは江戸時代中期から明治時代頃までの女性たちによる文人画を収集し、当資料館の特色を築きました。

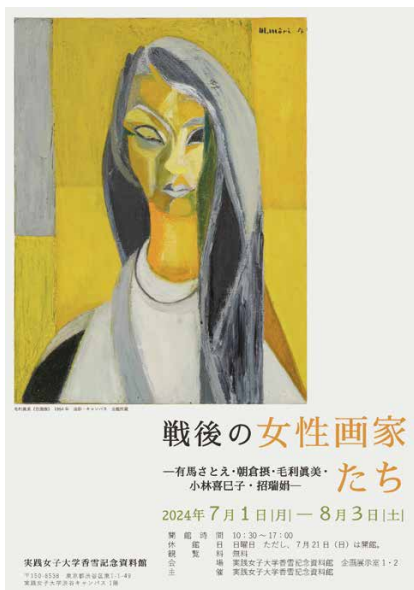
その一方で、2016年に朝倉摂の作品の寄贈を受けたことで、資料館の研究対象が戦後の女性画家の活動へと広がることになりました。舞台美術家として著名な朝倉摂（1922-2014）は、当初は日本画家として活動していました。父は彫刻家の朝倉文夫（1883-1964）で、朝倉は東京美術学校で長く教え、自宅の朝倉塾でも多くの学生を指導しました。摂は十七歳から伊東深水の画塾で男性たちに混ざって学び、戦後は佐藤忠良や中谷泰らと炭鉱や漁村を訪れ、労働者を写生し現代社会のリアルな状況を描きました。しかし若くして高い意識を持った摂にとっては男性中心で年功序列の日本画や評論家の世界は窮屈であったようで、1970年のアメリカ留学後は舞台美術家としての活躍が中心となりました。当館では2017年に、いち早く画家、朝倉の個展「朝倉摂 リアルの自覚」を開催し、画家朝倉摂の再評価に取り組みました。

またその後、洋画家岡田三郎助の指導を受けた有馬さとえ（1893-1978）のご遺族から有馬の油彩画のご寄贈を受け、2020年に小企画展「女性への教育と美術」をおこないました。有馬は鹿児島に生まれ、1911年から岡田三郎助の門をたたき、当初は内弟子として住み込みで学びました。さらに岡田が主宰していた本郷洋画研究所に通って男性たちに混ざって研鑽を積みしました。岡田は後に自宅に女子洋画研究所を開きますが、有馬は一足早く画家として活動し、文展、帝展で入選を重ねました。1926年には出品作が女性として初めて帝展特選となりました。有馬については没後その存在がやや忘れられていましたが、有馬作品を所蔵していた美術館では、当館の展示をきっかけに見直しをするようになったのではないかと自負しています。

2023年度に油彩画2点を購入した毛利眞美（1926-2022）の場合は、広島から上京して私立女子美術学校に入学するも病気により帰郷を余儀なくされました。しかし戦後間もない1950年に絵を学ぶためにパリに留学し、アンドレ・ロートの画塾で絵画理論を学び、ヨーロッパ美術から多くを吸収しました。帰国後三度の個展を開き注目されましたが、その後は画業を長く中断することになりました。没後、評伝『ふたりの画家、ひとつの家 毛利眞美の生涯』（高見澤たか子著、堂本右美編、東京書籍、2023年）が出版され、出版記念展も開かれたことで、新たに注目されています。

残念ながらまだ収蔵品はありませんが、戦前に自らの力でパリに留学して戦後も画家活動をおこなった森田元子（1903-1969）についても近年評伝『ヴァーミリオンの女』（井上由理著、平凡社、2022年）が出版されています。それぞれが強い意志を持って絵画に取り組んだ女性たちの作品と人生を知ることが、私たちにも大きな示唆を与えてくれます。本年7月から5人の作家の戦後の作品を展示します。学生さんたちに、こうした先達たちの取り組みを知ってもらい、これからの人生への励ましとしてもらえたらうれしいことです。

(KOJIMA Kaoru)



戦後の女性画家たち展チラシ



2024年度
実践女子大学
下田歌子記念
女性総合研究所
研究員

(五十音順)



高橋 桂子(所長・生活文化学科 教授)

久保 貴子(専任研究員・専任講師)

兼務研究員

大川 知子(生活環境学科 教授)

須賀 由紀子(現代生活学科 教授)

織田 涼子(美学美術史学科 准教授)

高橋 美和(人間社会学科 教授)

駒谷 真美(人間社会学科 教授)

田中 正浩(生活文化学科 教授)

佐藤 幸子(食生活科学科 教授)

広井 多鶴子(人間社会学科 教授)

志渡岡 理恵(英文学科 教授)

深澤 晶久(国文学科 教授)

標葉 靖子(社会デザイン学科 准教授)

村上 まどか(英文学科 教授)

客員研究員

愛甲 晴美(福生市郷土資料室)

関 登美子(実践女子大学非常勤講師・
元実践女子学園中学校高等学校教諭)

奥島 尚樹(元実践女子学園職員)

細江 容子(実践女子大学 名誉教授)

神木 まなみ(大正大学 教学マネジメント推進
機構 学修支援センター(DAC)コアチューター)

眞有 澄香(國學院大学大学院兼任講師)

牛腸 ヒロミ(実践女子大学 名誉教授)

松田 純子(実践女子大学 名誉教授)

鈴木 隆一(実践女子学園岩村町親善大使)

若森 慶隆(NPO法人いわむら一斎塾)

今年度の活動

研究所「年報」

第11号の発行(2025年3月)

実践女子学園の教職員であれば、どなたでも投稿できます。
詳細は本研究所 HP にてご確認ください。

企画展示 連携事業 特別企画展示

「新潟青陵学園と下田歌子」

2024年6月7日(金)～7月5日(金)
新潟青陵大学・
新潟青陵大学短期大学部



連携事業 特別企画展示

「新潟青陵学園と下田歌子」

2024年6月28日(金)～7月5日(金)
新潟青陵高等学校

特別展示

「開効社牧場と稲垣吉慎—下田歌子とその時代—」

2024年9月7日(土)～9月13日(金)
北海道斜里郡小清水町
小清水町コミュニティプラザ
(町立小清水図書館)



特別展示

「北見女学校と稲垣吉慎—下田歌子とその時代—」

2024年9月14日(土)～9月22日(日)
北海道網走市
オホーツク・文化交流センター
(エコーホール展示室)

日野キャンパス第68回常磐祭

学園資料の展示と研究所の活動紹介

2024年11月9日(土)、10日(日)
日野キャンパス

(協力事業)

「第22回 下田歌子賞」表彰式

2024年12月21日(土)
岐阜県恵那市
岩村コミュニティセンター

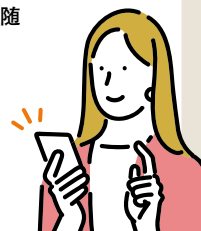
※詳細は、本研究所 HP でもお知らせいたします。変更になる場合もございますので、
随時御確認ください。



下田歌子記念女性総合研究所 HP

本研究所 HP では、「活動報告」「研究員便り」等を中心に、研究所の様々な取り組みを広く内外に発信しています。その他、定期刊行物の紹介、研究所主催のシンポジウムや展示の予定等も随時更新してまいりますので、どうぞご活用下さい。

詳細はこちら
<https://www.jissen.ac.jp/shimoda/index.html>



『ニューズレター』 No. 23

発行：2024 年 7 月 30 日 編集・発行所：実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所

〒191-8510 東京都日野市大坂上 4-1-1 電話：042-585-8945 E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp